

第5回駒ヶ根市自治組織の在り方検討会 会議録（要約）

日時：令和6年7月17日（水）

19時～20時30分

場所：駒ヶ根市役所本庁大会議室

1 開会（岡田副座長）

新規加入委員紹介（岡田副座長）

駒ヶ根市社協の松井委員に代わり、中村委員。

中村竜一 委員 自己紹介

（岡田副座長）欠席委員報告。木下委員、中澤委員、菅沼委員

2 座長あいさつ

＜森岡座長 あいさつ＞

第5回目の検討会。前回、今後話し合うテーマがだされた。①防災や、②ゴミ、子育て、介護などの重要な社会システムの在り方、③移住してこられた方への対応、④市からの依頼事項やデジタル化など。

今回は希望の多かったテーマに分かれてグループワークを行う。

白戸先生からもアドバイスをいただいた。委員から具体的な実績に基づいた建設的な意見をいただきながら、進めていきたい。

3 検討事項（森岡座長進行）

（1）グループワークについて説明

事務局説明

次第の＜グループワークの進め方＞、裏面名簿（25名出席）、会場図により

＜テーマ＞

（1）防災を通じて自治組織をどうすべきか

（2）ゴミ、子育て、福祉などのシステムについて自治組織をどうすべきか

（3）若い人に移住・定住してもらうには自治組織はどうすればよいか

グループワークの結果発表の持ち時間は各グループ5分以内

（2）グループワーク グループワーク【50分】19：10～20：00

＜目安の時間＞

①自己紹介 一人1分以内 【8分】19：10-19：18

②役割決め 進行役、書記、タイムキーパー 【2分】19：18-19：20

③グループワーク 【30分】19：20-19：50

④まとめ 【10分】19：50-20：00

（3）発表・記録 20：00～20：20

グループ（１）発表 20：00～20：05

<発表：林委員>

ではグループ１の方のまとめをさせていただきます。

結構皆さん流れの中でのとりとめのない話をしながら出てきたものを強引にまとめてみました。

防災というのはみんなの共通意識がある問題です。

その問題は何となくあるけれども、区に入らなくても、そこには気づかずに享受できているので、実際、区に入るメリットがないと感じている方もいる。防災は運営している自治会の上に乗っかっていて、成り立っていると思いますが、それはなかなか内部にいないと見えない。そこに温度差があるということです。

特にアパートなどで移動のある方は組織に入る気持ちも全然違うので、そういう問題もあると思います。

地区によっての加入率も全然違うので、一つの議論ではなかなか難しいと思います。

具体的には、町四区の自主防災組織の事例はテーマとして上がって、自主防災会と自治会はイコールではないという事です。自主防災が独立して、ほぼ 100%に近い加入率で、区からのお金をもらわず、その中でみんなが納得してお金を出し合って、成り立っている。なかなか面白いなという話をしました。

区長が自主防災組織の長を兼務していると、区長も自主防も両方とも 1 年交代なので、良く分からない内に防災訓練を迎えて、任期が終わってしまう。だから工夫もできないし、継続性がない。

区から自主防災組織が独立して、慣れた人が年数を重ねることで、工夫ができたり発展したりできるメリットがある。自治会には、今のままではみんな不満もあるし、今が完璧だという人は誰もいないんですよね。

だから何とかして変えなければいけないと何となく思う。けれども、それはなかなか難しい。やっぱり自治会には親方的な方がいて、区長を経験された方は横槍が入るし、やりたいことは全然できない。変えようと思うとなかなかできないと思います。

そこで役職を複数年できるような形で工夫をして、それぞれの役が独立性を持てばいいかもしれない。

その場合の問題点として、独立した組織がいくつも存在して、それぞれが別々に機能しているだけで、いろいろなことが解決するのかというと、決してそうではない。そこをどういうふうなところがまとめるのか。

中核となるのは自治会なのか。事務局体制を作り、そこを統括し、全体の方でも各組織を明確にして、区長やその役員の負担を、事務作業を行うことによって楽にしてあげる。そこには、お金出してもいいと思います。そういうことで住民が納得していくのであれば。

区長さんは、何でもかんでもやってるスーパーマーケットだから、てんてこ舞いなんです。それを分業して、餅は餅屋にしていこうという話が出ました。そうい

う選択も、次の、今の課題を解決していく形の一つではないかという話になりました。

グループ（２）発表 20：05～20：10

＜発表：中原委員＞

このグループは、ゴミ出しとか草刈りだとか、地域の中の生活支援というところからの目線をテーマにしていきたいなと思っております。

先ほどの防災のグループからも出たのですが、区に入ってるメリットがない、というところが一番大事なところだと思います。

私は社協からの委員なんですが、今取り組んでるのは、駒ヶ根市の16区で、それぞれの地域の中の生活支援の体制を作っております。ゴミ出し、草刈りだとか、中沢の方では送迎のボランティアとか、そういう体制を作ってます。

なぜこんな体制を作ってるかというと、一つは高齢者が増え過ぎてしまって、市役所は、行政だけではもうどうにもならない状況になった。ですので、高齢者が増えてくる中で、どうしたらいいか。それは「地域の中の支え合い」を、小さいことからやっていこうということです。

もう一つは、やはり地域の中で、組織に加入する、そういうメリットがあること。つまり、「年を取っても、この地域の中で安心して住み続けられるようにしたい」という考え方です。そういうものを持てば「区に入っていれば安心だ」ということが出てくるのではないかと思います。

それから、若い人たちとも、今日、一緒にお話しをしました。子育ての問題などを相談できる場所だとか、そういうものを考えていかなければいけないと思っています。真ん中にある、「困ったときに助けてくれる組織を作る」ということを、今私達が社協でも進めているところです。

その中で、防災のことでもそうでしたが、中には区に入っていない人たちをどうするのかという話も先ほども出ていました。これはゴミ出しでもそうなんです。ゴミ出しも区単位にやっているので、ある程度は区費が入ってます。皆さんが出してくれた区費で運営されてる部分が多いです。区に入っていない人たちをどうするかというと、区の中で助けるのはなかなか難しい問題です。費用負担の公平性の問題があります。中には「区に入っていない人なんか助ける必要はないのではないか」という考え方もあります、それも一つの意見です。

それをどうするか。社協全体、市全体で何かを考えていかなければいけない。（負担の公平性のために）有償でという事例もあります。区に入るメリット。一番大事なところをやっていけば、区に参加する必要性というのが出てくるのかなと思います。

もう一つは、駒ヶ根市もそうですが、行政は縦割りなので、なかなか子育てや高齢者の問題や、防災もそうかもしれませんが、いろんな問題は、縦割でやっています。

ですので、困ったときにどこへ相談していいかわからない。これ本当にそう

んです。「困り事ありますか」というアンケートをとっている区もありますが、ほとんどないんです。困りごとなんか。(これをやると長くなるのですが、)

困りごとに手を上げるっていうのはなかなか勇気が要ります。自分は困りますよとは、なかなか言い出せないものです。ですが、どこか身近に窓口があって相談する場所というのが、各区のようなところにあつたらいいなと思います。

区長さん達もそうです。私も区長を務めたことがあるのですが、大変忙しいです。何が忙しいかというと事務仕事が忙しいんですよ。区長をやること自体は、別に仕様がなと思ってやるのですが。

その中で、例えば各区の中に事務局(があって事務を行う人がいる)といううなものを作っていけば、そこがいつも開いて、いつでも相談にも行けるというのが一番大事だと思ってます。

ちょっと強引につなごうと思っているのですが、例えば北割一区でも草刈りを支援会議の名目でやっています。あるところで、一人暮らしのおばあちゃんが病院から退院した。そこへ草刈りに行っているときに、段々とそのおばあちゃんが立てるようになつた。

これは何かというと、みんな人は寂しいんですよ。誰かにいてもらいたい。自分も元気でいたいという意志が働くということです。子育ての人たちもそうなんです。大変なんです、手を挙げることができない。どこか、そういう繋がりができるような、駒ヶ根市ができてくると、(区の再編というよりも、区の再編もちょっと一つ自分で思っていることなんです、考えなければいけないことなのですが、)区のあり方というものが大事になってくるのではないかと思います。

例えば、区に入っていない人がどうか、これからの駒ヶ根市がどうか、そういう問題ではなくて。地域がちゃんとみんなで子育てする、みんなで年寄りを看ていくというような地域ができてくれば、すごく地域の一員に加わるメリットがあるのではないかと思います。

理想かもしれませんが、そんな駒ヶ根市ができればいいなと思っています。聞いていただいてありがとうございました。

グループ(3) 発表 20:10~20:15

＜発表：小池委員＞

それでは第三グループの発表させていただきます。

若い人に移住・定住してもらうには自治組織ははどうすればよいか。

この中の「まず若い人の意見を聞く」というところがキーワードになっています。年寄りの言うことだとか、定住して長く住んでいる方の意見も大事ですが、そちらの強い意見で通り過ぎるのではなく、若い人の意見を、「ボトムアップ」ができる自治組織、あるいは駒ヶ根市が必要ではないかというのが結論です。

若い人が移住あるいは定住して、「駒ヶ根市って素晴らしい市だな」ということを実感してもらうためには、まず一つの要素としては自治組織の中でどうか。そして、あとは駒ヶ根市としての役割というのが大きいと思います。

移住をしてもらうためには、「駒ヶ根市の知名度はどうか」、「住みやすい環境になっているのか」、「いろいろのランキングで上位にランクされているのか」「駒ヶ根市のPRの仕方はどうなのか」というところも、やはり考えないといけない。

今回の都知事選挙に立候補された安芸高田市の元市長さんの様にYouTubeで、バンバン審議会だとか公表して、若い人の知名度を保つとか、そんなことも一つの例です。

市としてプロモーションをしっかりしていろいろな角度からPRしていくことが大事ではないか。その要因が「認知度が高くない」とか、「子育ての支援がどうか」です。

風の便りでは、近くの村では非常にそういったところが手厚く支援されてると聞いています。そのため若い方の人口の比率が高くなっている。最近では隣の村も、そんなような話も風の便りに聞きます。内側でまずやっていただきたいことがあります。

そして、自治組織の中でどうなのかということです。

地域の中で自治組織の会費が高いとか、行事が多いだとか。自分たちはずっと長くやってきていて、行事などをやると、「なかなかいいことやってるじゃん」「こういうことも大事なんだな」と思うのですけれど。やはり、外から来た方たちは、そういうものに対して、負担感が非常にあるのだなと感じました。

今日は10人ぐらいのチームでディスカッションしたんですけど、冒頭に3人ちょうど移住された方のご意見を聞いて、やっぱり耳を傾けることが大事だと思いました。

従いまして、結論ですけれども、自治組織を持った方が良い基本的な考えは、駒ヶ根市役所から、区長会などを通じて、各区あるいは各自治組合に定住・移住してきた皆さんの意見を聞く場を設けるように。自治組合あるいは区の方で、そういう場を設けてくれと、そういうことで、市から行政の下の方あるいは自治組合に「トップダウン」で市長から指示してもらう。

今度はそれを受けて区あるいは自治組合はそういう仲介というか、グループディスカッションでコミュニケーションが取れるような会を設けて、そういった意見交換をした内容を聞いてもらおうと。そういうようなことが良いのではないかという事を第3グループの中で話し合い、結論として発表させていただきました。

(4) 質疑・講評

<質疑>

<中村哲委員>

3グループの、若者の意見を聞くといったようなところについてなんですけれど、先ほど2グループの方がおっしゃっていた、「困ったことがあっても相談しにくいということがあったが、意見を聞くときに、全部出せないような環境に

もなる思う。その人次第ということもある。困っている、もしくはこうしてほしいといったような意見の聞取りの具体的な方法などは、ありますでしょうか。

<北平委員>

お答えいたします。今の意見なんですけど、今回、移住者の方々の意見聞いてみると、まだ若い人たちの意見が、自治会のずっと定住してきた人たちのところに情報が伝わってない。地域の魅力をどうすればもっとアップすることができるかという事を、地域の中でもっと考えなければいけないのではないかな。それを今の自治会だとか、定住されてる方だけで議論してしまうと、なかなか魅力のある地域というのができない。

そのために、グループディスカッションの場を設けてはどうかという事です。

それを個々の区や自治会などの自治組織で立ち上げていたのでは、なかなか始まらないのではないかな。市からそういったことを投げかけてもらいたいという事です。

例えば、若い人、高校生に入ってもらって、高校卒業後、進学などで外に行くとします。その時に、地元に戻って来たくなくなるような地域というのとは、どういう魅力があるのかを聞く。移住者の方からも聞く。

そういったことを、組織の外側の方から聞いて、自分たちの地域でこれから何をしなければいけないかということを考える場を一旦作ったらどうかということとです。

<林委員>

3グループの方に質問です。確かにいろんなことを聞くと、いかにその意見を反映させて組織を作るかが今の課題だと思います。

我々にとって理想は、2グループのように、確かに「助けられる組織を目指す」ことだと思います。どのように今現在の組織に反映することができるか。出てきた意見を反映することができる組織に作り直せるかという事が、一番の課題だと思います。全般に関してもそうですが、特に3グループは、どうやって意見を反映させるかという具体的なお話があったとしたらお聞きしたいなと思います。

<北平委員>

具体的なところの部分までまだ来てません。

ただ、それをやって意見を聞かないと、我々の地区がどういった状態になるか、外から見て、会議だとか行事は古臭いままで、本当に魅力あるものになるかどうか。組織外部からの目や、若い世代の目から聞いたものでなければ、変えなければいけないものを、しっかり実感できていないと思います。まず、実感した上で、それをどうするかというのは、地区ごとにやり方が違うかもしれません。その地区ごとの魅力というのは違うと思うので。それを地域の中で1回議論をして、どういうふうにその形を作っていくのが良いのかをまとめると良

いのではないかという意見でした。

だから具体的にどういう組織を作るというところまでは話できていません。

白戸教授 講評

＜白戸洋アドバイザー＞

講評というか今回感じたことをお話させていただきたいと思います。

多分皆さんまだ何となくモヤモヤされてると思うんですね。

これで5回目ですけど、毎回話し合うんだけどそれがどう進んでるか、この先どうなるか。何となくは所々あれということも出てきてるというのが多分今の状態じゃないかと思います。

僕は経験的にこういう会議に結構出ています。例えば6回なり8回、10回やるときに、我々は何か1回ずつ階段あるように進んでいって最後の最後の10回に行ったときに上がるように考えるます。こういう議論はですね、1回から9回まで大体水平で、何が良くなったかわかんないんだけど9回目からスイッチが入って10回にポンと上がるっていう、そういうモヤモヤしながらも議論を積み重ねていく中で、いろんな視点が見えてくるので、もう少し我慢してお付き合いいただければなというか、一点目です。

とはいっても、今日、座長さんも心配されてたんですが、前回までのディスカッションの中で、例えば自治組織で、役員になるのが大変だとか、区長さんの仕事がたくさんありすぎるとか、行政がどんどん仕事があって大変だとかということは出ていたんです。それは多分全国どこでも一緒に、私の地元の町会でも一緒です。

それを提言みたいにして改革をするっていうようなことをまとめるのは多分今日にでもできるんです。

ところが、それをまとめたからといって、問題が解決するかというと多分解決しないです。

それはなぜかと言うと、講演でもお話したのですが、そもそも、地域の組織というのは目的があるから動いてきた。要するに、青年団が元気な頃というのは、若い人たちがたくさんいて、何かやりたいと。でもそのはけ口がないから、みんなでやろうといって青年団ができた。でも、それが若い人たちに色々な手段のはけ口ができてしまったら、もう、そこは集まらなくなっちゃうんですね。老人クラブもそうですよね。

だから、組織の中で残っているのは、衛生協議会と、子供がいなくなる限りは、PTAが残るのは、やらなければいけないことがあるから、目的があるからやっているんです。

メリットという話があったんですが、僕はメリットってあまりいい言葉じゃないなと思っています。例えば、うちの大学の学生が就職するときに、「楽な方がいい、給料が高くて休みが多くて、ストレスがなくて、土日休める、そういうところが良い」と言うんですよ。

とにかく、そういうことを優先して何でも良いからと就職した子と、やりたいことがあって、「もしかしたらブラックかもしれないな」とか、「多少大変かもな」と思っても、やりたいことを選んだ子とで、どちらが辞めるかっていうと、楽な方を選んだ子が辞めるんですね。やっぱり。

要するに、目的がないと、どんな軽いことをやっても嫌なんですよ。目的があれば、ちょっと位は何とかなるんですよ。目的があるから。

それを、メリットとかは別にして、これは自治組織も公民館もみんなそうだと思いますが、それをやる意味というのをみんなが明確にされていて、それが共有されていて、それに向けてどういう仕組みを作っていったらいいのだろうかということを考える事はやっぱり大事です。

多分、自治組織のあり方をこうしようというのは、口で言うのは簡単なのですが、じゃあ、実際にそれが本当にそうなるかということ、ほとんどならない。ならないのはなぜかということ、目的がないからです。だから、自己目的化をしている部分があるんですね。

逆に目的が明確に出てくると、時代の流れで動くんですね。

僕が住んでるのはYという町会で、すごく古い地区で、Y6人衆22分家で全部地区の土地を持ってるという、A温泉まで、昔は真っ暗だったそうです。みんな土地持ちで。僕が町会に入ったときには、「100年先まで町会長が決まっています」と言われました。

そこに戦後、H銀行とか地方公務員とかS大の先生たちとか新住民が入ってきて、家を建てて。それは大変でしたね。水路の掃除をするにしても、何で俺たちがやらなきゃいけないか。本当にもう何かね、最悪な感じでした。そこでS大学の寮ができるって、また大騒ぎになって。今でも町会に入っていない組があるくらいです。簡単に言うと仲が悪かったんです。

ところが1世代巡って、因業なじいちゃんばあちゃんが亡くなった途端に仲良くなっちゃったんです。

その次の世代の人たちが60を超えて定年退職をして年金生活になってきた頃に、介護保険が入ってきて、自分でやんなさいっていう時代になってきたわけです。結局その結果、かつて、みんな若くて元気でお金もあった時代は絶対できなかった公民館の建て替えができたんです。年金生活者が一件あたり50万円位出して、本当にバリアフリーな公民館を作ったんです。

それは多分お金だとかそういう問題じゃなくて、それを作ることが、自分たちにとってどんなに大事かってことをみんなが共有したからなんですよ。

そういう意味で今回、防災、それから生活をどうするかということ、あるいは若者とか移住の問題というのに分かれていただきました。そういうものをやるとすれば、今の自治組織が、どこがけいなくて、どうしたらいいかという議論になってくる。逆に、自治組織をどうしたらいいかということが少し見えてくるんじゃないか。そういう感じなんですね。

今日お話を聞いて、ずいぶんそれが、ちょっとずつですけども、見えてきた

ような気がします。ぜひ次回はですね、もうちょっと深掘りしていただければと思います。具体的に、これをやるためにこういうふうにしたらい、こうしてあげるっていう具体的なお話を出していただくと、より話は深まっていくかなというふうな感じがしています。

それからもう一点、移住のところで随分話が盛り上がっていたと思います。

M市では、皆さんご存知のようにAデパートが撤退をし、BデパートがY村に移って、駅前の空洞化というのが始まりだしているんです。Bデパートの関係者に聞いたら、あの辺のビルに入っていたテナントもみんなY村に移るそうです。だからあの辺のビルがガランとしていくんです。

BデパートのあるI地区も90件で構成している商店街振興組合が解散しました。理由は、90件のうち20件が何もやらないからということでした。俺たちだけで何でやっているんだといって、やめちゃったんです。そしたら何が困るかという、そこある樹に水やる人がいない。それからその水が流れですよ。あれは掃除をしないとその内にどぶ川になって臭くなります。今は、ボランティアが川の掃除をやっているんです。変な話ですよ。だからBデパートはなくなってしまった。Aデパートも見限ったところがあるわけです。

ところが、ちょっと離れたお城の近くに上土商店街というのがあります。

かつて、ここは賑わっていて、120店舗ぐらいあったのですけれども、駅前に重点が移って、近くにショッピングモールができたために、物販が減って2000年代の初頭には60件ぐらいになって、シャッター通りになってしまったんです。

ところが、上土の人たちは、ずっと町会と振興組合でまち作り協議会を作って自分たちで一生懸命勉強をして、まち作りの活動をずっとやってきました。

今上土商店街は19件の会員しかいないんです。19件の会員しかいないんですけれども、2000年の頭には60件だった商店が、今90件まで増えました。かつて120件だった商店街が、一時は60件まで衰退し、そして90件まで盛り返しました。増えたのは、ほとんど若い人たちです。2代目とか新しく移住してきた人とか、そういう人たちが上土で店を開きたいと。今は「何人待ち」ぐらいです。それから美容室だとか、美容室が町を気に入って、知り合いの整形のお医者さんを2人連れてきて開業したとか。それに関連してマツエクのお店ができたとか。そういう若い人たちがどんどん増えてそこで起業してるんですね。

でも、商店街振興組合には入ってないんです。なぜかという忙しくて入れない。起業したばかりの人は振興組合なんかやってられない。

だから振興組合はみんなお年寄りなんだけど、その人たちがやっているけれど文句を言わないんです。それで、その若い人たちの面倒を見るんですね。

なぜ若い人たちが上土に入ってくるのか。他の町に行くとね、足を引っ張られたり怒られたりするわけですよ。

でも上土に来るとどうなるか。飲み屋のお兄ちゃんが言ってました。「夜、ウチは隣近所にとってはうるさいからどうしたらいいか」と商店街の人に聞いた

ら、「あそこのおばあちゃんだけには挨拶しておけば大丈夫だから」と教えてくれる。要するに町の人たちが若い人を受け入れるんですよね。振興組合に入るとか、町会に入っているとか関係ない。そこにいるんだから。

なぜかという、やっぱり商店街ですから、たくさん人がいた方が賑やかでいい。要するに入るとか入らないじゃなくて、人がそこにいてくれることに何か評価できてるかどうかというのがポイントなんですね。

だから逆に若い人たちにとって居心地がいいので町に来てくれるし、最初は入ってなかった人が町会に入ってくれるんです。北風と太陽じゃないですけども、やっぱりそういう若い人たちを惹きつけるようなものが必要だということです。

もう一点、そこで感じるのは、そういう組織には入ってなくても個別に誰かと親しいんですね。町の人。だから情報はなくて話だったら、ある人を通して、あそこの兄ちゃんこうだよっていうのを、町の誰かがそれを聞き出してくれる。それは組織ではないので、普段のそこの地域の人間関係の問題だと思うんですね。

そういうところから組み直していかないと、この問題というのは、なかなか上手くいかないだと思います。それで、近くの村の話も出たし、長野県でも例えば白馬村とか、あるいは原村だとか。いくつか全国的にもすごく未来が明るい。原村と近くの村は全国でトップクラスに 100 年先まで人口が安定するっていう評価を受けているんですね。

なぜかという、行政も施策をたくさんしてますけど、行政だけではなくて住民の問題があるんですね。どういう人間関係を作り、どういう気持ちで近所の人がその人たちを受け入れているのかというのはすごく大きいです。

移住について地域でいろいろやってる方も、結局何を言ってるかっていうと、「選ばれる地域」という言葉です。選ばれるのは施設であるとか、補助金がたくさんつくとか、行政がいろいろやってくれるのではなくて、少なくとも、そこに住んでる人たちが温かく見守ってくれるかどうかというのが一番「選ばれる地域」としては大事なところですよ。

もちろん人間ですから、合う合わないがあります。逆に、ちゃんとしたところは、結構、視察だとか移住体験で住んでもらうというのを積み重ねたうえで、受け入れています。もう一点は地域の中の組織とかじゃなくて、人と人との関係。人と人とのネットワークをどういうふうに作っていけるかっていう視点です。その視点を少し入れていただくと、議論が少し膨らんでくるのではないかと思います。

とりとめもなく話させていただきました。また少し前向きに議論を続けていただければ良いと思います。よろしくお願いします。以上です。

(5) 先進地視察について

事務局説明 先進地視察について説明（目的地：飯田市）

(森岡座長)

4. その他

5. 閉会 (岡田副座長) 閉会の言葉

全体終了 20 : 30